
僕の妄想と夢魔

荒野 京介

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

僕の妄想と夢魔

【Nコード】

N6313Y

【作者名】

荒野 京介

【あらすじ】

夢魔が嫌な少年に食いついて妄想を叶える話。
可哀想な（主に少年が）物語である。

ブログ（前書き）

初投稿です。 高1のバカです。 長く続けられておもしろい話
になったらいいなあ。 てか俺がする！

プロローグ

プロローグ

この世界には夢魔と言う悪魔がいる。いわゆるサキュバスだ。夢魔は人の妄想を叶えてその者の幸福を餌として生きている。叶えた妄想の大きさが大きいほど叶えた夢魔の寿命は延びる。

そして長い年月を生きていくのだ。

夢魔にあつた者は幸せになれるしかしその者の妄想を叶えない限り夢魔は元の世界に帰れないし寿命も縮まる。

このようなルールがたくさんあるらしいのだが今はめんどくさいので他のややこしいルールは省いておこう

いやっ教えるのがめんどくさいって事はない。断じてないんだ。うん、

まあ軽く言っておくと妄想通りにしないと即死とか↑もっとややこしいルールです。 などなど。

てか・・・もう実際ルール聞いた時僕が理解できなかったただけなんだけどね・・・

まあそれは置いて・・・

この物語は最悪な少年Ⅱ僕こと中村弓弦なかむらゆづるに食いついてしまった可哀想な夢魔の物語である。

さてと、僕が夢魔を呼び出した最初の妄想の話をしよう。

？ K O K っ て泣ける言葉。

「んゝあれ？なんだっけ？」

僕は頭の中をフル回転させて妄想の続きを考えた。

妄想の途中で変なこと考えると道がそれで話しが続かなくなるんだ
よなあ・・・

さっきなんて女の子とファミレス行っつて所を妄想したら
この前ファミレスで友達と馬鹿話してたことを思い出して
女の子と何を話してるのかも忘れちゃったし。

最初から考え直すか・・・ L e t , s 妄想time！！

「好きです！付き合ってください！」

僕は顔を真っ赤にさせて女の子・・・うゝんまあ音夢
ねむ

っ て事にしておくか

音夢に向かって告白をした。

「嫌です！あなたキモイしオタクだし顔タイプじゃないし。」

うんゝっ言われた・・・えっ言いすぎじゃねっ！？

この台詞僕が恐れるK O K だ！？うゝー恐ろしい。

あっ！？K がきもいO がオタクんでK が顔ダメだし。

えっ別にW K O でも良いじゃないかって？

それだとなんか社会に出てくる団体みたいで。

そんな場合じゃない！

「・・・あっ・・・えーっと。それだけ？」

「えっまだ言っつて良いの？O K 任せて！？」

「イヤッいいっす！任せてないし！僕のH P をもうO に近いから。」

「あっそ、じゃ、これで。」

そして音夢は走り去っていった。

ある一言？を置いて

「うえっー」

そして僕の恋は散った。

．．．．．あー泣ける

妄想なのに涙がこみ上げてくるよ。

ありゃ．．泣いてる僕！？

妄想で泣いてるよ！？現実で振られたら僕死んじゃうんじゃないの
！？

そう思うくらい泣いていた。

（明日も学校だし寝るかな。）

そして僕は夢に落ちていった。

？ 正妄って起きたら嬉しいよね！

次の日僕はいつものように……遅刻していた。

「ん〜中村……お前今月で4回目だぞ、ついでに今日は6月5日だ！」

そしてついでに1日は休みだったな。」

「へーいすみません。」

「まあ中村なんてどうでもいい。そしてみんなに良い知らせがある！」

「えっ？！先生それはひどいよ！僕も生徒なんだから少しぐらい叱るという

事をしてくれても良いと思いますよ！」

「弓弦はDMなの？……」

おっつ……やっちまった……つかまって欲しくて。。

「おいおい、僕のどのあたりがDMだとペツタンコの美紀……グベエッ」

痛い！こめかみが頭が細長くなっただんじやない！？

ほしかわ 星川 みき 美紀の得意なゴリゴリげんこつだ。

「美紀……どうもすみませんでした。」

僕は今月で一番の土下座をした。

まあまた記録を塗り替えられるかもしれないけど。

「んっ謝ったからよろしい。なんて言うと思った？」

笑顔が恐いと思った瞬間。

「グハッ」

溝うちを思いつきり蹴られた。

「ふうーこれですつきりした。今までのストレス発散できたわ。」

「僕はサンドバックか！？てか先生なんでこの暴力現場をスルーするの！？」

「んでみんなに紹介しよう！転校生の神栄 かみざかえ 音夢さんだ！」

「先生まだスルーするの！先生実は僕のこと生徒だと・・・えっ
言葉を失った。転校してきたのは女の子でしかも

昨日妄想してた女の子そっくりだ。

そして彼女の顔を見て僕は涙を流した。

あれ？おかしいなまだ振られてないのに涙があふれてくる。

「おっおい！中村スルーしすぎただから泣くな。」

「いやっ先生気にしないで話しかけると心がズキズキするから。」

そして神栄さんに顔を向ける。

「うえー」

えっデジャブ！？おいおい・・・正夢かよ・・・いやっ正妄？

しかし今の僕の心にはその言葉？は核兵器並みの凶器だよ神栄さん。

「ちよつと、屋上に行つてきます。。。」

「弓弦！？ちよつとどうしたの？」

「き・・・気にしないでくれ・・・ちよつと終わりにしたいんだ。」

「弓弦・・・行つてきなさい！」

「うわーん！酷すぎる！うわーん」

ガタガタ（立ち上がる）・・・トタトタトタ（走る）・・・ズテッ

（こける）・・・ヒクッ（泣く）・・・ガラガラ（引き戸を開けて）

・・・
ウワーン

僕は逃げたのだった。

？非行って良いと思うよっ

ここは僕がかよう高校、私立才源高校さいげんの屋上だ。
なんで僕がこんな所にいるかって？

それは・・・

「心が折れちまったよ！！バカヤロー！！」
はっ叫んだ僕。

昨日の本当に振られたらどうなるんだろうの結果はあれだな・・・
叫ぶなんだ僕。単純だ・・・かなしっ。

それにしても不思議な出来事って本当にあるんだね。

僕が妄想した事に近いことが起きるなんて・・・
世界は不思議でいっぱいだね。

そう僕は空を見ながら黄昏れていた。

まあ空は青空じゃなく曇り空でちよつと不愉快な気分になるけどね

(笑)

キィー

鈍いこの音！？この音は屋上の扉が開く音！！

(たぶんあれでいいよな？女子が来るパターンだよな！)

僕の心の悪魔が言う。

(女の子が迎えに来るパターンでしょこれ！？)

そして天使も言う。

ちよつと悪魔と天使が同じ意見って何！？

って突っ込みたいが今はそれどころじゃない！

僕の・・・僕の妄想が止まらなーーーーい！！

後ろの足音が近づいてくる。

そして僕は笑顔で振り向きこう言ったんだ。

「僕の事を迎えに来てくれたの？ありがとね。もう心配はいらない
よ、マイ、プリンセス！」

これが僕の本気の告白だ！

「今、俺は中村を山に埋めてその上から嘔吐をしてやりたい気分だ。それに俺はお前の担任だ

ホームルーム中に飛び出したお前を殺してでも連れ戻すのが俺の役目だ（笑）」

僕の本気が3秒で崩れ去った。

少女？・・・プリンセス？・・・男の娘？・・・このごっつい男は・・・

「うげっ先生！？僕の愛情のこもった台詞を返してよ！男になんかに言う台詞じゃないのに！」

しかも嘔吐とか殺してとか生徒に向かって言う言葉じゃない！」

「ほお。そうかそうか迎えに来てやったのに中村はそう言うのか。」

「言いますよ！相手が男でしかも先生だなんて！僕が嘔吐したいですよ！」

「ついでに聞こう。もしお前が最初から俺だと気づいていたら何て言ってたんだい？」

僕は十秒考えてこう言った。

「尾O 豊さんの「卒業」と「15の夜」を熱唱します！」

「中村が反抗的なのは分かった。よしお前には特別に・・・」

「特別に？・・・」

そして先生はこう言ってくれた。

「提出する課題を倍にしてやる（笑）」

僕の心が再び折れた。

「そんな最悪だあああああ！！」

僕の声は学校中に響き渡った。

「まあー今回、私を呼んだのはあの男なの？私の好みじゃないわ。まあ役目だから

付き合うしかないのかな？」

そういつて屋上でやり取りを見ていた転校生は校舎の影へと消えていった。

？サンドバックなんて興味ありません！

「ふうー課題を多くされるのは回避できたけど、なんで僕がこんなに雑用をしなきゃいけないんだ！」

そう僕は今あの忌々しい担任からの雑用命令をこなしていた。

雑用の内容は学校にあるポスターすべての張替えだ。

高校のポスターってどれだけ多いと思ってるだあの先生・・・

もお200枚は張ったのにあと余裕で200枚以上はある。

はあ・・・美紀にも手伝ってくれるように頼んだのに・・・

学校が終わる直前の頃・・・

「今日、僕の雑用をこの後鉄だつてほしいんだけど」

「えっ？なんであたしがサンドバックの手伝いをしなきゃいけないの？」

「ちよつ美紀！名前をサンドバックに変えないで！？みんな変な目で見てるよ！主に美紀のこと！」

「あーそれは私のこの美貌に見とれてんのよ。」

「どこに美貌があるか！？このぺったんこが！！・・・どぼあっ！！」

強烈な腹フックが決まった。

「貧乳は！！・・・貧乳は！！・・・普通なのよ！ステータスなの！胸が大きいからなんなの！？」

ていうか胸が大きいのってデブってことじゃないの・・・ねえ？弓弦！！」

「それ、グラビアアイドルに失礼なんじゃ！。。。がはっ！」

次はきれいなアップーが僕のおごに直撃していた。

「ねえ、弓弦・・・ぺったんこでも良いわよね？」

美紀の笑顔が怖かった、非常に怖かった。

「そつだよ、貧乳だからって気にするな美紀！貧乳でもきつと良いことが……」

・ 良いことが……あつ……貧乳好きの男が好きになってくれ……

げばらあああ！」

強烈な左ストレートが右のほつぺたにやってきた。

「弓弦なんてゴミ捨て場にいる害虫みたいになっちゃえ!!」
と暴言をおいて教室から出て行ってしまった。

「はあ、僕が悪かったかな……」

と考えながらポスターを貼り続けていると

「ちよつとそのキモイあなた。」

……… なんか神栄さんに呼ばれた。

つてキモイ男だから僕じゃないか（笑）

男子生徒なんてほかにもいるし……

「ちよつと聞いていますかキモイ顔のあなた！」

大きな声で僕の顔を指差されながら言われてしまった。

………

「ん、何かな？ちよつと僕屋上からスカイダイビングをしたい気分
なんだけど。一緒にどう？」

「あなたは頭が狂ってるんですか？スカイダイビングをいきなりし
たいとか

言い出すなんて顔だけじゃなくて中身もキモイですね。」

「いやっ！スカイダイビングしたくなつたのは主に神栄さんのせい
だから！」

「責任転嫁とかキモイですね！」

……… もおいしい……どうせ僕はキモイから……話を進めよう……

はあ……もおいやだこの世界……

「んで何かなちよつと雑用を早く終わらせたいんだけど。」

「ちよつと、こっちに來てください。」

そう言われると僕は手と引つ張られた。

「えっ？あの・・・知り合いだっけ？」

「いいからきなさい。」

命令形だった。

「はい」

そして僕は校舎裏に連れて行かれた。

僕は何かの小説でこんな話を呼んだ事がある。

いつもキモイとか言われてるのにいきなり女子に「校舎裏に来て」と呼ばれる。

そしてワクワクしながら校舎に行くと・・・

初めてかつあげされるという話だ。

かつあげされるのかな・・・神栄さん転校してきたのが今日なのに
なんかすごいな

そう思っていると彼女は口を開きこう言った。

「キモイあなた、昨日妄想してた通りに私に告白しなさい。」

「えっ！？何で？てかなんで妄想の事知ってるの！？エスパーですか！？」

てか僕にもプライドがあるし、神栄さんの行為はプライバシーの侵害だ！」

「いいから、言わないと殺しますよ。」

なんか、彼女のお話は飛んでいた・・・

殺す？殴るじゃなく殺す？・・・アハハハまったくかわいい冗談だなあ

「かわいいジョークだね。殺すだなん・・・」

ボコオ！！

・・・彼女の右拳の下あたりの土に大きい穴が開いていた。

「ごめん、神栄さんもう一回やってつくれるかな？何が起きたかわからないんだ。」

そう僕が言つと

「しょうがないですね、後一回だけですよ？」

そういうと彼女はかわいい顔で答えると左拳を軽く持ち上げ地面に突き出した。

ボゴォ！！

・・・・・・大きな大きな穴が開いていた。

「よし僕の妄想通りに告白をしようじゃないか。」

冷や汗がやばい！殴られる！死ぬレベルの突きだぞあのパンチは？
空気圧で穴があくって何？

「お話がわかつてくれて良かったです。」

何この子！？怖い！怖い！怖い！

人じゃないでしょこれ！もおプライドとかプライバシー言っ
てられないよ！

「好きです！付き合ってください！」

「嫌です！あなたキモイしオタクだし顔タイプじゃないし。」

「・・・・・・あ・・えーとそれだけですか？」

涙をこらえる僕！

「えっ！まだ言つて良いんですか？OK任せてください！」

「嫌いいつす！任せてないし！僕のHPはもう0に近いから。。。」

「あっそうですか、じゃあこれで。」

そして彼女は僕に背を向け走って行くそしてこっちを振り向き

「うえー」

・・・・・・僕は倒れた

涙の出すぎで干からびそうだ。

今日の朝の想像以上だ、叫ぶことすらできない

願っていない告白で振られるなんて僕はなんて不幸なんだ。

「はあ・・・・」

ため息をついて僕は立ち上がる

そうすると走って行ったはずの神栄さんが

ものすごい勢いで僕の方に向かって走ってきた。

ものすごい顔で・・・うんとても怖い。あの顔は般若？

それにしてもなんでこっちに走ってくるんだ？

「・・・・・・・・！」

なんか叫んでるみたいだけど・・・聞こえないな・・・

「な・・・・・・・・の！」

へ？なんだか分からない・・・そして神栄が僕の前に来てこう言った。

「なんで！あなたの妄想を叶えたのに！私はここから消えないの！」
はっ？僕は相手が何を言ってるのかさっぱり分からない。

「えっ消えるって何？神栄さん何言ってるの？」

「私は人間じゃないんです！あなたの妄想を叶えたら消える存在なんです！あっ！」

なんか神栄さんが「言ってしまった！」見たいな顔をしている。

「人間じゃないって？」

そう訪ねると彼女は重そうな口を開いた。

「そう、わたしは人じゃありません。私は人の夢を覗きその夢を叶え人の幸せから力をもらう夢魔です。」

夢魔って何？

「こっちの世界で言うと・・・サキュバスですかね？」

「サキュバス！？」

サキュバスは知ってる！あのエロイ格好をした可愛い西洋の妖怪でしょ！

でも神栄さんの顔は般若に近い状態になってたし。

「ちよつと、失礼なこと考えてませんか？殺しますよ。」

なぜばれた！てか素直に答えたら殺されそうだしここは

「考えてないよそんなこと！いやっ上栄さんは般若みたいにきれいだなっつて。」

「ついでに夢魔は人の頭を覗くことができます。」

「そ・・・そうか（笑）んでさーそんな笑顔で襟締め上げないで！苦しいグベエー！」

「ああすみません力を入れすぎましたっ！」

「ちよっ！！締め付けがああ。強iiiiiiii！！・・・きゅう
う」

「あれ？落ちちゃったんですか？しかし私は何で消えないんでしょうかね

夢は叶えたのに？ちよつと頭覗いてみますか。」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6313y/>

僕の妄想と夢魔

2011年11月23日20時46分発行